

巻頭言

三・一・一

現代宗教研究所所長 三原正資

二〇一一年三月一日に発生した東日本大震災は東京電力福島第一原子力発電所を襲った。もし、この震災がなければ「原子力の平和利用」を保証してきた「原子力発電所の安全神話」は、今しばらくわが国では信じられていたかもしれない。しかし、マグニチュード九・〇の大地震によって生まれた大津波は福島第一原発の全電源を喪失させ、冷却不能となった三基の原子炉の中では炉心熔融（メルトダウン）という最悪の事態が発生した。

三度の水素爆発によって炉内の大量の放射性物質は東北及び関東一帯に飛散した。首都圏の近くで、このようなきわめて危険な事態が起こることを誰が想像したであろう。大地震の一撃が「原発の安全神話」をうち砕いた瞬間だった。わが国の歴史が大きく変わるといふ予感に、誰もが震えた一日だった。

しかし、はたして、わが国の歴史は変わるのだろうか。「三・一・一」を体験した私たちに、変えていく意志があるのだろうか。日本敗戦の年、「八・六」「八・九」「八・一五」のとき、人びとはどのように考えたのだろうか。

広島原爆遺児の作文集『原爆の子』は一九五一年に出版された。「序」に、次のような記述がある。

(私たちは) 原子力が持つ「偉大な善をもたらす道」―原子力の平和的利用に力強い期待をかけている。広島島の街々に原子エネルギーを動力とする燈火が輝き、電車が走り……広島こそ平和的條件における原子力時代の誕生地でなくてはならない。

「序」を執筆した長田新おさだあらたは教育学者であり、自身被爆者でもある。なぜ、そのような人が占領の影響下にあったとはいえ、原爆犠牲者七回忌のこの時期に被爆地広島で、原子力の平和利用を「偉大な善をもたらす道」とまで賛美したのか、私には謎である。

一九四八年、作家大田洋子は『屍の街』を出版して

広島は戦前、水の都と自稱していた。戦争ちゆうは軍都と誇示し、戦争が終つたとたん
に文化都市といいかえた。いまは平和記念都市という……

と、いささか自嘲気味に述べている。

この後、一九五四年、ビキニ環礁で実施されたアメリカの水爆実験によって、マグロ漁船第五福龍丸乗組員二三名が被爆し、久保山愛吉無線長は死亡した。この事件をきっかけにして原水爆禁止運動は全国に広がった。

ところが一方では、原子力の平和利用の名のもとに英国やアメリカから原子力発電所建設の技術が導入された。日本各地に原発は誘致され、着工、そして運転が開始された。泊、女川、福島、浜岡、柏崎刈羽、敦賀、島根、伊方、玄海等の原子力発電所である。一九六四年

の東京オリンピック、一九七〇年の大阪万博、オイルショックをへて日本社会がバブルへと向かったころのことである。

このようにして私たち多くの日本人は原子力の平和利用⇨原発の安全神話を受け入れ、戦後の復興と高度経済成長社会を実現してきた。

さて、わが宗門及び教師は戦後の復興期そして成長期に原子力の問題に、どのように対処してきたのだろうか。

日蓮宗新聞にその様子をうかがうと、原水爆禁止運動に宗門として取り組んだ熱気が伝わる。

世界立正平和運動 旱天に慈雨を齎した青森県大会（昭和三十一年六月一〇日）

人類の悲願 原水爆禁止を全世界に訴う 第三回原水爆禁止世界大会 議長団を代表して増田管長力強く挨拶（昭和三十三年九月一日）

立正平和運動、北陸に展開 福井県 駅前を堂々唱題行進 原水爆禁止を管長導師で訴う 石川県 悲劇の歴史に終止符を打て 管長、平和への熱意を激賞（昭和三十三年四月二〇日）

「宗門運動四〇年の総括」（『現代宗教研究』二〇号 昭和六一年）の中で中濃教篤師は、

原水爆禁止を訴える世界立正平和運動は東京オリンピックの終った昭和四〇（一九六五）年頃には沈滞期を迎えたと述べている。

極左運動ではない 世界立正平和運動の立場表明 本部長茂田井教亨（昭和三九年五月一〇日）

「立正平和運動本部は偏向してない」 茂田井教亨（昭和三九年一〇月一〇日）
という日蓮宗新聞の記事は、沈滞の事情と運動の将来を暗示している。

この東京オリンピックが開催された一九六四年には、現代宗教研究所が設立され、戦災で焼失した池上本門寺大堂が復興し、宗務院庁舎の池上移転が決議されている。宗門の復興と戦後体制の確立とともに、政治色を帯びているとみられた立正平和運動は下降線をたどった。さて、昭和三〇（一九五五）年代の立正平和運動の一部は現代宗教研究所の活動へと引き継がれたのではなからうか。昭和四〇（一九六五）年代の現宗研が目指していたのは一九七二年開催の第五回中央教化研究会議の報告（『現代宗教研究』第六号所収）にあらわれているように、この頃日本各地に起こっていた公害問題である。そして、最大の公害、環境汚染である原子力災害への関心と言及がみられるのは、一九七九年、アメリカ・スリーマイル島原子力発電所の事故が発生した年に開催された第一二回中央教化研究会議（七〇〇遠忌報恩身延教師結集大会）である。

「七〇〇遠忌報恩と伝道教団づくりをめざして」と題する基調報告で、近江幸正師は次のように述べている。

核兵器だけでなく「原子力の平和利用」にも私たちはまた危機的な様相を見ないわけにはいきません。（略）一とたび重大な事故が起これば、核兵器の場合と質的に変らない放射能を広範囲にまき散らして住民の身体をおかし、その後遺は後代にも及ぶのです。（略）企業や政治の大衆操作に乗って欲望充足の現在の生活を維持しようとする人々のエゴイズムが危機を深める原因になっています。

ついで、一九八二年の第一四回中央教研では「社会問題に対する教師の姿勢と取組み」と題して河崎俊栄師が発表し、一九八六年のソ連チェルノブイリ原発の事故をうけて、梅森寛誠師が「原発問題と日蓮宗徒としての展望」と題する論文を寄せている。（『現代宗教学研究』第二三号）

この後、『現代宗教学研究』に掲載された原発関連の論文は左記の通りである。

「原発を考える―番神岬はいま―」（石川浩徳）『現代宗教学研究』第三四号

「環境問題の解決には学問が必要」（槌田敦）同三四号

「原発増設で温暖化対策、という過ち」（梅森寛誠）同四〇号

「大地動乱の時代を迎えて、原発との『共存』を強いられる私たちは」（梅森寛誠）同四

〇号

「『不都合な真実』から見えてくるもの―地球温暖化問題の問題を考える―」（梅森寛誠）
同四二号

「日本が核武装？ 立正安国はスローガンではありえない」（梅森寛誠）同四三号

一九七九年のスリーマイル島原発事故以後の『現代宗教研究』の諸論文において、原発の危険性について適確な指適がなされてきた。しかし、この三月一日の福島第一原発の事故以前は、残念ながら私たち教師の間で原発の危険性について認識し、危機感を共有していたとは言えない。

なぜだろうか。一九七〇年代はじめに学生運動が衰退し、以後、日本経済は二〇年後のバブルに向って駆け上っていくのだが、その間に、敗戦とともにわが国にいわば仕掛けられた「原子力の平和利用」という国の政策、それを推進するためにつくられた「原発の安全神話」に、私たちが強くからめとられていたからではなからうか。

今年末には太平洋戦争開戦七〇年を迎える。彼我の国力の差を無視した無謀な戦さだった。しかし、今日、地震列島上に一七ヶ所、五四基の原発が存在していることは、さきの戦争にも比べうるほどの、いささか良識を逸したプロジェクトではあるまいか。
私たちが生きてきた「戦後」については次のような見方がある。

「戦時」の体制が、紛れもなく「戦後」の一部ですらあったのだ。敗戦と占領の数年間からそれにくく復興と高度成長、社会の再構築プロセスを、つまり「戦後」と名指される

プロセスの全体を、むしろ「戦時」からの連続性として把握することが必要である。（『日本近現代史⑨ポスト戦後社会』 吉見俊哉 岩波新書 二〇〇九）

「原発の安全神話」どころか、私たちは「戦後という神話」を生きてきたのかもしれない。「三・一一」は、近代以来ひたすら経済成長の夢を追ってきた日本人を目覚めさせるために、大自然が加えた一撃だったのかもしれない。私たちには、この多くの犠牲者をともなつたさまざまな惨事をわが国の将来の礎にする義務があるのではなからうか。
